

地域に開かれた学校づくりは大切です！～東須磨小に学ぶ～

神戸市立東須磨小学校は、“職員間暴力・暴言”という大きな問題を解決し、いい学校へと生まれ変わろうとしています。風評被害を乗り越え、立て直すために懸命に頑張っている東須磨小職員のみなさんに敬意を表したいと思います。地域・保護者に開かれた学校づくりなど、花園小学校区が目指しているものと共通するところがたくさんあります。参考にしていきたいと思います。

「学校が変わろうとしている」

■東須磨小教員間暴行・暴言1年

教員間暴行・暴言があった神戸市立東須磨小学校(同市須磨区)。再生に向けて歩みを進めるのは教員だけではない。保護者や地域も関わりを増やそうとしており、「学校だけでなくみなで子どもを育てていく」との思いを共有している。(1面参照)

問題発覚から1年。学校の雰囲気について保護者も変化を感じている。

「以前よりも子どもたちのあいさつの声が大きくなった。ずいぶん変わった。東須磨小PTA会長の和田浩司さん(57)は話す。

発覚前、学級崩壊状態のクラスがあった。和田さんは「学校全体のバランスが崩れていた」と振り返る。保護者の声も学校に届かず、不満があっても「どうにもならない」と諦める人もいたという。

今春の人事異動で教員が大幅に入れ替わった。別の保護者は「信頼できる先生が配置され、学校が変わろうとしていると感じる」と

運営 保護者・地域と共に

受け止める。保護者同士の結びつきも強まり、学校周辺で花を育てるグループもできた。

一方で、「行事などについて知らされない。体質は変わっていないのではないかと」と不満がくすぶり続け

ている保護者もいる。和田さんは「学校だけでなく、住民みんなで子育てできる地域にしたい」と希望を口にした。

同小は2021年春から、地元の市民が学校運営に積極的に関わる「学校運営協議会制度(コミュニティ・スクール)」の導入を目指す。登下校中の見守りや放課後の子ども居場所づくりなど学校運営の一部を地域が担う取り組みだ。教員間暴行・暴言問題の調査報告書では、学校という「世界の狭さ」が問題の早期発見と解決を遠ざけた要因だと指摘された。小山光一校長(56)は「学校にも地域にもプラスにしたい」と構想を膨らませる。



玄関で児童を見送る小山光一校長

「児童や地域住民に訪れてほしい」。職員室入り口にはそんな思いが込められている。いずれも神戸市須磨区堀池町1、東須磨小学校(撮影・中西幸大)

